

第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義

谷川, 栄彦
九州大学法学部

<https://doi.org/10.15017/1409>

出版情報 : 法政研究. 27 (2/4), pp.365-380, 1961-03-25. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :



第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義

谷 川 栄 彦

一、はじめに

フランスは一八六七年に南部ヴェトナムのコーチシナを征服して、これを「直轄植民地」とした後、一八八四年には中部ヴェトナムのアンナンおよび北部ヴェトナムのトンキンを「保護領」として、ヴェトナム全土に対する植民地支配権を確立した。しかし、フランスのヴェトナム征服過程は、決して安易なものではなかった。各地で相次いで起ったヴェトナム人の激しい反抗にぶっかったからである。フランスがヴェトナム全国を平定してしまうまでに、三〇年以上の才月を費したのも、かかる抵抗のためであった。しかし、その反抗の先頭に立ち、それを指導したのは、民族主義者や共産主義者ではなく、封建的専政君主制のもとで大きな社会的特権と権威を享受していた官人 (mandarins) や儒学者 (lettrés) たちであった。彼らは、フランスによって奪われた彼らの社会的特権・地位あるいは破壊された儒教的価値の防衛や回復のために起ちあがったのであり、近代的社会改革をその斗争目標としたのではなかった。その斗争は、専ら各地における地方主義の運動に終始し、人民大衆の民族意識にもとづいた国民的規模での独立運動にまで発展することはできなかった。その斗争が「復古的反抗」とよばれ、民族の独立と社会の近代化を目指す民族主義ナショナルリズムの運動と区別されているのは、そのためである。

しかし、二〇世紀に入ると、アジア・東南アジアの多くの植民地・半植民地におけると同様に、ヴェトナムにも民

族主義思想が芽生え、その運動が展開されるようになった。本稿の目的は、第一次世界大戦前における、いわゆる発生期のヴェトナム民族主義の性格を明らかにすることにある。

一、ヴェトナム民族主義の発生

ヴェトナムにおける民族主義発生の社会的基礎は、そこにおける政治・経済的支配権がフランスによって独占されていた事実にあつたばかりでなく、その支配が伝統的土着民社会に与えた衝撃インパクトのなかにあつた。とくに、一八九七年にドゥーメール (Paul Doumer) 総督によって始められ、その後の歴代総督によって受継がれた経済開発政策は、フランス資本のために、鉄道・道路を新設し、耕地面積を拡大し、農・鉱業や商業、運輸業など資本主義的諸企業を發展させる基礎となつたが、その反面、それは土着民社会に深刻な影響をあたえた。開発事業の進展に併う資本主義・貨幣経済の滲透・発達は、自然経済と農村共同体に立脚した土着民社会の基礎を掘崩し、土着の大地主や高利貸をつくり出すと同時に、農民や手工業者の貧困化とプロレタリア化を促進した。プロレタリア化した土着民や零細な土地しか保有していない農民は、フランス資本の経営する農園や鉱業その他企業の労働者となり、経営主の苛酷な搾取のもとで、労働者階級形成の基礎となつた。この階級は、旧ヴェトナム社会には見られなかつた新しい社会的要素であるが、さらにもう一つの新しい階級は、土着の地主層の中から生まれた土着ブルジョアジーであつた。土着ブルジョアジーは、フランス資本の経済的独占と、植民地政権の政治・経済的抑圧政策によって、その正常な発展・成長を阻止され、その規模はきわめて小さかつた。さらに、西欧式教育をうけた土着の知識人も、地主層や資産家の子弟のなかから生まれた。植民地政権が彼らに対して教育を施すようになったのは、主として、資本主義企業や植民地統治機構における下級職員を養成する必要があつたからである。もとより、かかるインテリの数はきわめて限られてい

たが、その全てが就職の機会に恵まれたわけではなかったし、たとえ就職しえても、彼らの地位と給料はフランス人に比して余りにも低かった。⁽¹⁾

このような土着民社会の変化は、第一次世界大戦以後さらに深化し、地域的にも拡大する。戦後、フランス資本の経済開発がさらに進み、土着民社会に一層深刻な影響を与えるようになるからである。したがって、ヴェトナム民族主義は、かかる社会的変化の初期の段階に照応して、発生したといえることができる。

民族主義思想を最初に身につけ、その推進・普及者となったのは、一部の開明的儒学者と、近代教育を受けた知識人であって、「復古的反抗」の指導権を握った官人ではなかった。官人たちはドゥーメール総督の統治機構改革によって、アンナン王朝とともにフランス統治機構の中に組込まれ、植民地支配の道具と化してしまい、民族主義運動の指導者となることはできなかった。しかし、開明的儒学者やインテリ層は、ルソーの『社会契約論』やモンテスキュウの『法の精神』をはじめ、ヴォルテール、チドロロー、アダム・スミス、スペンサー、ミルなどの書物を読むことによって、近代ヨーロッパの民族主義や革命思想を学ぶことができたし、マツチニー、ガルバルジー、カブールなどの思想やイタリーの民族統一の歴史についても知ることができた。さらに、中国における康有為等の改良主義や、明治維新による日本の近代化も、彼らに大きな刺戟を与えた。しかし、このような新しい思想や知識は、ヴェトナムにおけるフランス人によって教えられたものではなかった。土着民の民族主義を怖れた彼らは、土着民に対してフランスの尊厳や絶対王政、ナポレオンの業績などについて教えても、フランス革命やヨーロッパの民族主義については教育しなかったからである。ヴェトナムのインテリ層は、植民地政権の眼をかすめて、専ら中国訳の書物を通して、前記ヨーロッパの革命思想や民族主義思想を体得した。⁽²⁾

こうして土着のインテリ層及びそれと密接に結びついていた土着ブルジョア層の間に、しだいに民族主義思想が根

を降しつつあった時、ヴェトナム人に大きな民族的刺戟と自信を与えたのは、日露戦争（一九〇四—一九〇五年）における日本の勝利であった。それは、ヴェトナム人の間に信じられていた白人優位の神話を打破り、彼らにヴェトナムの解放と近代化への欲求と自信を与える要素となったからである。当時の著名なヴェトナム民族主義指導者、ファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu）は、その手記『獄中記』（一九一四年）の中でつぎのように書いている。

「日露戦役は実に私達の頭脳に一新世界を開かしためたものと言うことが出来ます。我國民はフランス侵略以前には、只中華あるを知って居ったのみでありましたが、フランス禍以後は又只フランス一國あるを知るのみで、世界の変遷、風潮の推移如何の如きは我國民の夢想だも為さなかつた所で、私達積年の奔走も、身命を一擲し様と言う痛憤復仇の天性に驅られて居ったばかりで、独立の具体的計画の如きは、尚五里霧中に在ったのでした。後に國を棄てて海外に出で、頭脳甦めて一変した訳ですが、夫も亦日露戦役の余波が影響したものと云はざるを得ません。」^(三)

日本の勝利とともに、当時インド人民の間に風靡しつつあったスワラジ運動もまた、ヴェトナム人とともにインテリ層やブルジョア層に強い刺戟をあたえた。^(四) ヴェトナムのインテリ層やブルジョア層の間に、民族主義思想が日露戦争前後から急速に強まり、それが実際の運動となってあらわれたのは、こうした事情からであったが、その運動には二つの主要な潮流があった。一つは、ファン・ボイ・チャウを先頭とする急進主義的運動であり、他はファン・チャウ・リン（Phan Châu Trinh）を中心とする改良主義的運動であった。

(一) ヴェトナムにおけるフランスの植民地支配と資本主義の発展及びヴェトナム社会の変化については、主として次を参照。

Paul Bernard, *Nouveaux Aspects du Problème Économique Indochinois*, Paris, 1937, 175pp.; Charles Robequain, *L'Évolution Économique de l'Indochine Française*, Paris, 1939 (松岡孝見・岡田徳一共訳「仏印經濟發展論」、有斐閣、一九五五年、四二四頁); Thomas E. Ennis, *French Policy and Developments in Indochina*, Chic-

ago, 1939, 230pp. ; Ellen J. Hammer, *The Struggle for Indochina*, Stanford, Calif., 1954, pp. 54—79. ; Frank N. Trager, ed, *Marxism in Southeast Asia : A Study of Four Countries*, Stanford, Calif., 1959, pp. 102—106 ; George McTurnan Kahin, ed., *Governments and Politics of Southeast Asia*, Ithaca, New York, 1959, pp. 315—323.

(二) Lê Thành Khôi, *Le Việt Nam: Histoire et Civilisation*, Paris, 1955 pp. 385—386,

(三) フアン・ボイ・チャウ 潘佩珠「獄中記」(大岩誠著「安南民族運動史概説」、ぐろりあ・そさえて発行、一九四一年に全文邦訳所収。同書、九六頁)

(四) *Tê Thành Khôi*, op. cit., p. 386.

三、フアン・ボイ・チャウとフアン・チャウ・リン

フアン・ボイ・チャウはもともと儒学者であったが、フランスの圧政とアンナン王朝の不遇に義憤を感じ、一九〇二年、王朝へ忠誠を誓う勤王の残党を召集して独立の旗を掲げることを企図した。全国を遊説し、同志を募った。彼は『琉球血涙新書』という檄をとばして訴えたが、その中で、「社稷滅亡の惨状と降伏の国王が奴僕となるの屈辱とを述べて、宣しく民智を啓き民気を涵養して、滅亡を救い恥を雪ぐの基とせねばならぬ」ことを力説した。彼のこの思想は、「復古的反抗」の思想と軌を一にするものであったが、当時すでにその反抗も途絶え、全国民がフランス植民地支配の圧政に呻吟していた時だけに、彼の言動は多くの人々に感銘をあたえた。一九〇四年、彼は同志を集め、アンナン王朝のジャ・ロン帝 (Gia Long) の直系クオン・デ公 (Quang De) を会主に戴いて、一つの秘密結社をつくった。彼らは、フランスのヴェトナム征服の経験から、ヴェトナム解放のためには近代軍隊と海外からの援助が

絶対必要であると考え、この問題を処理するため、チャウを日本に派遣することを決議した。^(二) あたかも、日露戦争において日本が勝利した時期であった。

一九〇五年、彼は軍事援助を求めて日本にやってきた。彼は中国革命の志士、梁啓超の紹介で、犬養や大隈など日本政界の指導者にも会って、軍事援助を乞うた。しかしながら、日本の現実を観察し、日本の政治家や中国の亡命革命家と接するうちに、彼の考えは急速に変わっていった。彼はその手記の中でつぎのように書いている。

「私が初めて国を出た時は、専ら軍器問題に没頭して居ったのですが、東京に住むこと数ヵ月、日露戦争の詳細な状況と日本の外交政治教育実業の現状を察しては、深く自分が鎖国の中に在って、其見聞は模糊、思想も甚だ偏執な事実に想到して、深く之を恥ぢ……」^(三) 「区々たる武器問題の如きは、独立を図る成功の最大要件では無いと思うにいたった」^(四)

近代的社会改革に裏づけされた独立の必要性を痛感するようになった彼は、『遊学を勤むる文』を書いて、ヴェトナムの青年たちが奮って海外に遊学し、近代的教育・思想・技術を体得するよう呼びかけた。彼は一九〇六年四月クオン・デ公を伴って再び日本にやって来て、公を会長として「ヴェトナム近代化協会」(Viet Nam Duy Tân Hoi)を結成する一方、『海外血書初編』をはじめ『新越南記念録』、『越南史考』、『海外血書続編』などをあいついで著わし、ヴェトナム青年の海外遊学と愛国心の昂揚を切実に訴えた。それはヴェトナムの青年たちを開眼させ、奮起させた。彼らはフランス植民地政権の厳しい監視の眼を探めて続々出国し、中国(主に広東・広西省)や日本へ渡った。香港では、チャウの指導のもとに、これら留学生の渡航費や必要書類を世話するための事務所や、ヴェトナム資産家からの財政援助を処理するための「越南商団公会」(Viet Nam Thung Doan Cong Hoi)も設けられた。^(五) 一九〇七年から翌年にかけて、東京にやって来たヴェトナム留学生の数は、約一五〇名に達した。^(六) チャウはあたかも「仮設公使」のような存在となり、これら留学生の世話を奔走する一方、「新越南公憲」を制定し、ヴェトナム

ム臨時政府のモデルをつくった。^(七)

ファン・ボイ・チャウが専ら国外にあって、復古思想から脱皮して民族主義・近代思想を固め、ヴェトナム青年の海外留学指導を中心として活躍していた時、もう一人の著名な民族主義者ファン・チャウ・リンは、国内にあって、青年・大衆の啓蒙や新教育の普及に努力をつづけた。彼も、ハン・ギ帝 (Hann Nghi) の反フランス・復古斗争に参加した儒学者であり、官人でもあったが、中国の改良主義や中国訳の書物を通して、ルソー、モンテスキューなどの近代西欧思想を学ぶうちに、だんだん改良主義思想を身につけるようになった。彼は、チャウの運動に啓発されて、彼自身の実践運動に入るようになり、一九〇五年には一時日本にもやって来た。彼とチャウとの間には、ヴェトナムの独立という点で相異はなかったが、それを達成するための方法・手段の点では、両者の間に大きな隔りがあった。チャウが外国の援助によって独立を達成しようとしたのに対して、リンはそれを期待しなかった。彼はことに、日清・日露両戦争で台湾、朝鮮を獲得した日本の帝国主義的膨脹に対して、大きな懸念と疑惑をもっていた。また、チャウが、外国の発展に刺戟されて青年の近代・民族主義的教育を重視するようになったとはいえ、やはり武力ないし斗争による独立の構想を抱いていたのに対し、リンは、武力によらずむしろフランスと協調しながら、大衆に近代教育を施し、一步一步ヴェトナムの政治・経済・社会制度を近代化することによって、独立を達成しようと考えている^(八)。チャウが専ら小ブルジョア・インテリの急進主義を代表していたのに対し、リンは、ことに中国改良主義の影響をうけていたインテリ層やブルジョア層の思想を代弁していたことができる。

ファン・チャウ・リンは全国を歩いて彼の思想を説き、民族的エネルギーの発揚を説いて廻った。植民地支配の道具となってしまうていた官人たちの嘲罵にも屈しなかった。一九〇六年八月十五日に行われたポール・ボウ (Paul Beau) 総督記念祝賀会の時には、彼は大衆を前にして、官人制度の腐敗と誅求を激しく非難した。ヴェトナム人で、

ヴェトナムの伝統的社會制度や君主制度を公然と否定したのは、これが初めてであった。^(一九) 大衆はすでに、植民地支配のカイライとなった王朝や官人に対して尊崇の念を失いかけ、不満さえ抱きつつあった時だけに、^(二〇) 彼の言動は大衆の間に多くの共鳴者を見出すことができた。彼の影響と指導のもとに、いろいろな地方に研究会や商工会が設立され、改良主義的ジャーナルも発刊されるようになった。なかでも、一九〇七年三月に創立した「トンキン自由教育協会」(Dông Kin Nghia Thuc) は、新思想普及センターとなった。そこでは、多くの男女学生が学んだ。旧来の儒教的感覚からすれば、女子が学校に入学するということは、到底考えられないことであった。彼らには、ヴェトナム・中国・フランスの三カ国語が教えられ、植民地政権の学校・教育が故意に無視していたヴェトナムの民族文化、政治学、経済、自然科学も講義された。新教育の狙いは、時代遅れの伝統・慣習の破棄、大衆の文化水準の向上、近代経済の建設などであった。「社会の基礎としての人民、永遠に存続する民族、過去の遺物としての君主制」という学生間の合言葉や、彼らの短髪は自由教育協会の性格を端的に示していた。頭の上にまげをゆう伝統的慣習に反対し、西歐風に髪を短く刈りこむことは、「文明開化」のシンボルであったからである。自由教育協会系の新しい教育・思想は、そのこの学生のみならず、多くの人々に深い感銘をあたえずにはおかなかった。^(二一)

(一) フア・ポイ・チャウ 潘佩珠 「獄中記」 (前掲訳書、九四頁)

(二) 同前、九五頁

(三) 同前、一〇五頁

(四) 同前、一〇八頁

(五) Lê Thành Khôi, op. cit., pp. 387—388

(六) Le Temps, le 3 mai 1908 に掲載された在日ヴェトナム留学生の手紙によれば、当時の在日留学生は約六〇〇名となつて

する。この手紙は Ennis, op. cit., p. 178 に再引用されてゐる。

- (七) 「獄中記」(前掲訳書、一一五頁)
- (八) Lê Thành Khôi, op. cit., p. 391 尚、彼の思想の一端は *L'Asie française, mai 1913, Pp. 218—223* (quoted in Ennis, op. cit., p. 180) において知る事ができる。
- (九) Lê Thành Khôi, op. cit., p. 391.
- (一〇) Dang-Chan-Lieu, "Annamese Nationalism", *Pacific Affairs*, 20 (March, 1947), p. 62.
- (一一) Hammer, op. cit., p. 60; Lê Thành Khôi, *ibid.*

四、一九〇八年の騒擾と「ヴェトナム光復会」の結成

ファン・ボイ・チャウの勧誘によって日本にやって来たヴェトナム人留学生は、日本の実情に接して強い刺戟をうけ、ヴェトナムの独立・近代化意識をさらに燃やした。彼らは、ヴェトナムの友人に手紙や檄文を送って、同胞の覚醒と奮起を求めた。一九〇五年十二月に一人の在日ヴェトナム留学生が祖国に送ったつぎのパンフレットは、その一端を示していた。

「ヴェトナムの全ての権力と権益は、青い眼をした赤毛の白人の掌中にある。黄色人種のわれわれは、むりやりに墮落させられ、屈辱をうけている。……わたくしは諸君の公僕であり、一介の学生にすぎないが、日本の近代史を学んで、日本人がいかにして無力なヨーロッパ人に勝利することができたかを知ることができた。われわれが、組織をもつにいたったのも、そのためである。……われわれは、最も精力的で、勇敢な若いヴェトナム人の中から選抜して、彼らを日本に留学させている。……われわれの目的は、将来のためにわが国民を教育することにある。」^(一)

在日留学生は、一九〇八年からその翌年にかけて、つぎつぎに帰国した。彼らはいろいろな街頭デモを指導し、各

地で大衆講演を行い、パンフレットを頒布したりして、活潑な活動をつづけた。そのパンフレットには、「フランスがインドシナを放棄するその日のために」^(二)全国民が起上るよう訴えられていた。一方、ファン・チャウ・リンの門下生やその影響をうけた青年たちも、植民地政権の弾圧によって「トンキン自由教育協会」が、創立いらいわずか九月にして閉鎖のやむなきにいたったにもかかわらず、その後も学習と啓蒙活動をつづけた。

こうした学生や青年の民族主義的活動は、農民を中心とする広範な大衆のフランスに対する不満の増大や反抗と結びついて、一九〇八年には最高潮に達した。ドゥーメール総督によって始められた経済開発政策は、土着民に対する重税政策となつてあらわれる反面、一九〇二年いらい三年間続いた凶作と、ピアストル貨の下落は、土着民へ致命的打撃をあたえた。植民地政権に対する彼らの強い不満が、ヴェトナム全土に漲りつつあったその時、日露戦争における日本の勝利が伝わってきた。それは、暗雲となつてヴェトナムを掩い、大衆の民族的自覚をよびさまし、彼らの不満と敵愾心を湧きたたせた。それだけに、彼らに対する民族主義的學生・青年の影響力もまた、大きかった。

かくして、一九〇八年は植民地政権にとって、「危機の年」となった。農民を中心とする広範な大衆の重税反対運動が、一九〇八年三月十一日フェイホ(Faifo)で起つたのを手初めとして、同月三十一日にはクアン・ナン(Quang Nam)、四月九日にはチュア・チェン(Thua Thien)、同月十六日にはビン・ディン(Binh Dinh)という具合にアンナン、トンキンの多くの省でつぎつぎ勃発したからである。運動に起上つた大衆は、一団となつて所轄官庁に押しかけ、重税に抗議し、減税を要求した。彼らの中には、植民地官憲の弾圧に抗するために、各自の家にバリケードを構築する者もあった。この重税反対運動を指導したり、その運動に直接影響をあたえたのは、多くの場合、ファン・チャウ・リン門下の「短髪運動」の推進者や信奉者であった。そのためこの減税運動は、一般に「短髪運動」と呼ばれている。^(三)さらに、六月二十七日は、ハノイにおいて、フランス軍兵營の食物に毒を投じ、約二〇〇名の兵士を中毒

させ、混乱に乗じて植民地政権を覆滅しようとする事件もおこった。この事件は、ファン・ボイ・チャウの流れを汲む急進主義的民族主義者と、復古的反抗運動の著名な指導者ホアン・ホア・タム (Hoang Hoa Thám) 一派が、共同でおこしたものと^(四)いわれている。

大衆の減税運動や暴動に対する植民地政権の弾圧は、秋霜烈日を極めた。時の総督クロブコウスキ (Klobukowsky) は、かかる運動を軍隊を出動させて鎮圧する一方、事件に関係ある者も無い者も区別なく逮捕して、多くの者を斬首・拘禁・懲役・流刑に処した。タン・ディン (Tan Dinh) の儒学者チャン・キ・カップ (Trang Ki Cap) は、何の証拠もないのに、農民運動に関係したという理由で、斬首の刑に処せられた。ゲ・チン (Ghe Tinh) のチャン・カク・ラップほか数名の者は、所轄行政庁に丸腰で出掛けて行って、祖税の軽減を陳情したというただそれだけのことで、同じく首を刎ねられた。さらに、ファン・チャウ・リンやズオン・バ・チャク (Duong Ba Trac) など八〇名に及ぶ改良主義的民族主義指導者も、逮捕されて、コンドル島 (Polo Condor) に流刑となった。フランス植民地政権は、土着民の改良主義的運動さえも容赦しなかつたのである。^(五)

植民地政権は、こうして、土着民の切実な要求や民族主義活動をはげしい弾圧によって鎮圧してしまつたが、さらに在日のファン・ボイ・チャウや留学生にも厳しい追究の手をのぼした。植民地政権は、土着民スパイを買収して、留学生への資金網を探らせ、これを破壊するとともに、留学生の父兄・親類まで逮捕して、極刑に処した。^(六)さらに、フランス政府は、一九〇九年、日本政府に対してチャウなど指導者の引渡しと、在日留学生団の解散を要求した。日仏協定を結び、フランスとの友好関係を欲していた日本政府は、フランス側の要求を容れて、留学生の出国を迫るとともに、留学生団の諸印刷物をすべて没収してしまつた。その印刷物は、チャウや留学生がヴェトナムの同胞を鼓舞するために準備していたものである。^(七)

日本を追放された留学生たちは、四散して、或る者は中国に他の者はタイに渡り、ファン・ボー・チャウもクオン・デ公とともに中国へ移った。在日ヴェトナム人に対する日本政府の措置は、彼らにとって大打撃であった。ここにおいて、チャウは再びフランスに対する武力斗争を決意するにいたった。その時の心境を、彼はつぎのように述べている。

「この時において私は果して何をなすべきであろうか？……何を以て自分の責を塞ぐべきか、この時の私としては反って暴動の一途に走らざるを得なかったのです。暴動と自殺と、皆短見で、遠慮なき者の行為ではありますが、自殺せんよりはむしろ暴動に如くはない。蓋し、暴動は尚万一成功の僥倖があるからであります。況んや、この時の私の状況としては、暴動の外執るべき道はなかった。」^(八)

彼は、一九〇九年からその翌年にかけて、香港を中心に武器購入のため東奔西走したが、資金や運送の問題で、それもまた彼の意の如く運ばなかった。ところが、このような時に、中国では孫文の率いる辛亥革命が勃発した。チャウは、在日当時、章太炎など中国革命の志士から思想的影響を受け、彼らをはじめ朝鮮、フィリピン、インド諸国の革命運動家たちとともに、「東亜同盟会」を組織したりしていただけに、「中華革命軍起ると聞いて、大いに共鳴の感無き能はざる次第であった。」^(九)一方、中国革命の報は、一九〇八年の騒擾事件におけるフランス植民地政権の弾圧を逃れて中国に亡命していた人々や、ヴェトナム国内の人民大衆にも大きな影響を与えずにはおかなかった。多くのヴェトナムの青年や民族主義革命家たちが、踵を接して中国へやってきて、チャウの周囲に結集するようになった。彼らは、いろいろな面において、中国の革命家や革命政府の援助をうけることができたので、この機に乗じて事を挙げようと決意するにいたった。「私（チャウ）平生の急進主義が既に衆人の賛成を得たので」^(一〇)、彼らは一九一二年五月、広東において、クオン・デ公を会主に戴き、「越南光復会」^{ヴェトナム} (Viet Nam Quang Phuc Hoi) を結成した。

光復会はヴェトナムの解放と独立共和国の樹立を斗争の課題として、臨時政府をも樹立し、クオン・デを大統領、フアン・ボイ・チャウを副大統領兼外相に任じた。しかしながら、光復会はいまだ明白な政策綱領と組織綱領をもっていなかった。^(二)この意味では、それは近代政党組織ではなかった。フランス政権に対する軍事蜂起を最大の狙いとした光復会は、『越南光復軍方略』を起草して、作戦計画を練るとともに、「越南光復軍々票」を印刷し、香港には「クオン・デ銀行」を開設して、軍資金の調達をはかった。また、『河城烈士伝』や『勤告習兵文』などの印刷物をヴェトナムに送って、大衆の武装蜂起を訴える一方、「事を挙ぐる時は必ず三路同じく進むことを図って」、ヴェトナムと広西、雲南、タイの国境には、それぞれ光復会支部長を配置した。そして、ヴェトナムにも会員を潜入させた。^(三)

- (一) *Le Temps*, le 3 mai 1908 (quoted in Ennis, op. cit., p. 178)
- (二) Ennis, op. cit., pp. 178—179.
- (三) Milton Sacks, *Political Alignments of Vietnamese Nationalists*, Washington, D. C., (U. S. Department of State), 1949, p. 4; Lê Thành Khôi, op. cit., p. 179.
- (四) Sacks, *ibid.* 大岩誠、前掲書、四三頁。
- (五) 大岩誠、前掲書、三七頁。
- (六) 「獄中記」(前掲訳書、一一六頁)
- (七) 同前。
- (八) 同前、一一七頁。
- (九) 同前、一一〇頁。
- (一〇) 同前、一一一頁。
- (一一) Sacks, op. cit., p. 6. ソ同盟科学アカデミー歴史学研究所編「植民地・従属国の歴史Ⅲ」三一書房、一九五四年、八九

(一一) 「獄中記」(前掲訳書、一二二頁)

五、むすび

ヴェトナムに潜入した光復会員は、専ら植民地官憲に対する激しいテロリズムを敢行したが、一九一三年末には、ファン・ボイ・チャウをはじめ光復会幹部がフランス当局によって逮捕され、光復会も解散させられてしまった。この間の具体的敘述については、紙数の都合で他の機会に譲らねばならないが、最後に、第一次世界大戦前の、発生期におけるヴェトナム民族主義の若干の特徴点を指摘して、本稿のむすびとしたい。

ヴェトナム民族主義は、フランスの植民地支配の発展、フランス資本の積極的開発の進展に伴う伝統的土着民社会の崩壊、階級分化の拡大、農民層の零落、労働者階級の形成、土着ブルジョアシーとインテリゲンチヤの発生などが始まった時期に照応して、かかる事態を基礎として発生してきた。そして、その民族主義の発展に影響をあたえた国際的条件は、主として、日露戦争における日本の勝利と中国辛亥革命運動であった。民族主義のかかる国内・国際的諸条件は、単にヴェトナムについていえるばかりでなく、基本的には、他の東南アジア諸国についてもいうことができる。しかし、ヴェトナム民族主義、とくにその指導者が、いろいろな意味において、日本と中国の直接的影響を強く受けた点は、他の東南アジア諸国の民族主義に比して、たしかに特異であった。ヴェトナム民族主義の指導層は、土着のブルジョア層やブルジョア・地主層の支持をうけたファン・チャウ・リン一派の改良主義と、主としてブルジョア・インテリゲンチヤを代表したファン・ボイ・チャウ一派の急進主義に分かれていたが、かかる分派の在り方も、発生期の東南アジア民族主義の一般的現象であって、決してヴェトナム特有のものではなかった。

しかし、他の東南アジア諸国では、改良主義的民族主義のみならず、急進主義的民族主義も、一定の条件のもとでは、その合法的存在と活動が許されたのに対して、ヴェトナムでは、いずれの場合においても、植民地政権の容赦ない弾圧によって、それがほとんど不可能であった。このことは、ヴェトナム民族主義の正常な発展を阻止し、秘密結社とテロリズムに走らせる原因となった。そして、ヴェトナム民族主義が大衆に影響を与え、彼らの支持を得たとはいえ、それは、当時のインドネシアの民族主義政党、サリカット・イスラム (Sarekat Islam) のように、より広範な大衆との結びつきを確立することはできなかった。もとより、ヴェトナム民族主義が、大衆への滲透と影響力の点で大きな限界をもっていたのは、単に植民地政権の故ばかりでなく、その他にもいろいろな原因があった。それは、植民地支配と資本主義の衝撃によるヴェトナム社会の変化過程が、いまだ初期の段階にあったという事実の中に求めることもできる。その社会的変化の中で、封鎖的農村共同体と地方主義がだんだん破壊される反面、土着のブルジョアジー・インテリゲンチヤ・労働者階級が生まれて、近代民族および民族意識の社会・経済的諸条件が形成されつつあったとはいえ、これら諸条件が拡大・発展して、民族主義の一層の滲透・普及を容易ならしめる社会的基盤ができるためには、第一次大戦以後の発展を待たねばならなかった。戦後、フランス資本による一層大規模な開発が行われ、そのもとで土着社会はさらに深刻にして広範な衝撃と変化をうけるようになるからである。戦後のヴェトナム民族主義が、戦前と同様な植民地政権の弾圧にもかかわらず、戦前の民族主義に比して、質的にも量的にも発展するようになる要因は、戦後の国際情勢の変化もさることながら、かかる国内の社会的変化に求められねばならぬ。

このように、第一次世界大戦前のヴェトナム民族主義は、植民地政権の弾圧ばかりでなく、当時の社会的制約の故に、広範な大衆への指導権を確立することができず、その意味では大きな限界をもっていたが、それにもかかわらず、その民族主義運動の意義は、決して無視さるべきではない。民族主義者の各種形式の活動やそれに伴う大衆の反

フランス意識や反抗の増大は、植民地政権の残酷な弾圧を招く反面、植民地政権を憂慮させ、時には震撼させて、その譲歩を獲ちとる要因となった。例えば、一九一一年にインドシナ総督に就任したアルベール・サロー (Albert Sarraut) は、土着民対策に大きな関心を払い、土着民官吏の採用を容易にするような行政改革、彼らの俸給引上げ、土着民福祉の観点から公共事業、教育、医療施設の普及を図った。もちろん、かかる措置はきわめて制限されたものであり、土着民の立場からすれば、ほんの僅かな譲歩にすぎず、決して彼らの満足すべきものではなかったが、彼らの民族主義や反抗がそれを獲ちとったことには間違いないかった。